



不来春山心中  
(序)

望月明

序

御山の桜は本当に見事ですねえ。

思わず、と言った風な呟きが聞こえてきて、私は振り返った。小笹山の麓の駅は、毎年この時期になると、桜目当ての参拝客で賑わう。駅に降り立つと広がる絶景に、あちらこちらから歓声が聞こえている。気高く聳える小笹山が、天頂の雪を残して、見事な桜色に染まる光景は、誰もが感嘆の吐息を漏らすものだろう。その男の声がやけに耳に残ったのは、ただの偶然とは思えなかった。

振り返って先にいたのは、背の高い男だった。私が振り返ったことに気づくと、その男は帽子の鍔をそっと持ち上げた。笑い皺がくっきりと刻まれた目元が、いっそう優しげに細められる。

「はるばるやってきた甲斐がありました。いい冥土の土産になりそうです」

「もう冥土ですけれどね」

男は笑った。「旅路は長いですから」

見知った顔であるような気もするし、まったく覚えのない顔のような気もする。

はて、記憶力はいいほうだと自負していたはずだが。私は男に問いかけた。

「これから最後の法廷ですか」

「ええ。その前に一度、御山の桜を拝んでおかねばと思ひまして。冬の間を待っていたんです」

御山の桜を見ずには逝けぬが、見返り峠を見ては逝く。

そんな小唄があったことを思い出す。見返り峠は十王法廷参拝最後の難所として知られたところだが、この路線が再開されてからは、峠を行く者も今はいない。小笹の御山も随分詣でやすいところになったものだ。

小笹山の桜の花びらは免罪符になると言われている。

花びらが風に吹かれて舞ってきたのなら、それを肌身離さず身に付けておけば、どんな罪人でも必ず許され、善人ならば一層良い裁きが下される。そんな噂が伝わっている。まったく、どこからそのような根も葉もない迷信が生まれたのかと、以前の自分ならばさぞ憤慨していたことだろう。

「では、桜のお守りを？」

「いいえ。滅相もない。私はただ、この景色を一目拝んでおきたいと思っていただけです」

「そうでしたか」

「あなたは……法廷参りの道中ではないようですが、この近くにお住まいなので？」

「いいえ。しかし、何故か毎年この時期になると、小笹の山を見ずにはおれぬようになってしまっ

「わかりますとも」

駅前の通りには、花見客目当ての屋台が隙間なく軒を並べている。麓へ至るまでのなだらかな

坂は、暖かい日差しに満たされていた。

「私は日本中を旅してきましたが、生きている間は、ついぞ、これほどに見事な桜にはお目にかかれませんでした。いや、強いて言うなら、嫁と出会った花見の席くらいなもので。いや、まったく小さな近所の公園でしたけれども」

「それは素晴らしい」

桜に思い入れのある男なのだなと思う。

初対面の男に、懐かしさのようなものを感じてしまったのは、そのせいなのだろうか。

「細君はご健勝でしょうか」

「ええ。元気にしとると思いますよ。何、覚悟はしておったでしょう」

私は男の横顔をちらりと見た。働き盛りで壮健な夫であれば、妻がその死を覚悟するような場面は、通常なかろう。病に臥せっていたか、あるいは日常的に死に近い職業であったか。近頃、半ば世捨て人のような生活を送っていたせいで、現世の事情にはとんと疎くなってしまっていない。

「山を登って行くと、一番桜と呼ばれる御神木があるという話を聞いたのですが、毎年詣でていらっしゃるのであれば、ご存知でしょうか？」

「はて。小策の桜は若木に至るまで全て神木ですから」

「それはもう見事な、天にも届くような桜の巨木だとか。いや、桜がそうまで大きくなるとは思えませんで、伝承の類だろうとは思っていましたが」

「天ですか」

男は知らぬだろうが、この先を進めば、樹齢千年を超えるような桜ばかりが織り成す、幽玄な世界が広がっている。どれが一番というのは到底判じようがない。

「もしあるのなら、私も見てみたいですね。ここは、友の墓ですから。天にも届くような一番桜があるというのなら、きっと、そこに眠っていると思うのです。いえ、亡骸は消えてしまったので、墓ではないのですが。山の桜を見たがっていたので……。この桜全てが墓標のような気がして、どうにもこの時期になると、ここへ来てしまう。いや、陰気な話をしてしまいましたね」

「とんでもない。よろしければ話を聞かせていただけませんか」

屋台の呼び込みが賑やかに通りに木霊している。小さな兄弟がりんごあめを持って走り抜けていった。

「長い話になってしまいそうなのですが」

「連れもない道中でしたので」

男の浮かべる表情は、山の桜にどこか似ていた。

私は遠い記憶を振り返った。

「どこからお話したものでしょうか。ことの起こりは、おそらく天雁の世だったと思うのです。天雁といってもご存じないでしょうが、現世の暦でいうところの、江戸末期あたりでしょうか。ここにある第十法廷におわす五道転輪王さまが、お生まれになる以前の話です」

「それはまた、確かに、長いお話になりそうですね」

どこか感心したような相槌を受けて、私は知らず口元を緩めていた。

「長い話なのですよ。そのころ、春が来ない山と書いてコズハルという、その名の通り、年中、雪に覆われた険しい山がありました。先代の五道天輪王は、未だ現世でお暮らしになっており、天は小さなイタチだったそうです。なにやら自分から始めておいてなんですが、日が暮れそうな話ですね。少し、短いところからはじめましょうか。そう、この駅にも、なかなか興味深い来歴があるんですよ」

「そういわれてみると、風情があるような」

男の語尾は疑問形を作るときのように上ずっていた。風情と言うにはいささか誇張が過ぎる、風変わりな――むしろ私は、悪趣味だと思っている――駅だった。

「遊園地だったんですよ。ここは」

→ 第一話「サードリバーサイドパークの憂鬱」へ続く